



名大祭パンフレット表紙 (第11・12回)

#### 四、時代を映す名大祭②—一九七〇年代

##### ◆第一一回～第二〇回のテーマ

名大祭一覽(②)には、一九七〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。一九六〇年代のテーマと比較すると、メインテーマが短くなっている一方で、サブテーマが長くなっています。また、この期間のほとんどのメインテーマでは、「青春」や「歌」がキーワードになっているといえます。

この時期は、いわゆる「大学紛争」が鎮静化した時期にあたります。名古屋大学でも、鶴舞キャンパスでの「医学部紛争」を一つの契機として、東山キャンパスでの「大学紛争」が一九六〇年代末に起こりましたが、この時期にはすでに沈静化していま

## 名大祭一覧（2）

| 回  | 開催年（日程）                      | テ　　マ                       |  |
|----|------------------------------|----------------------------|--|
|    |                              | メ　　イ　　ン                    | サ　　ブ   |
| 11 | 1970年<br>（5/30， 6/10<br>－14） | 変革にいとむ青春                   | 新しい歴史厳粛に迎える我ら<br>真理への情熱を燃やし 統一と<br>団結の鉄鎚を鍛えん                       |
| 12 | 1971年<br>（6/9－13）            | 怒れ知性燃えあがる日本列島              | 真理究めるわれら 逆巻く濁流<br>をついて 平和と民主主義の統<br>一をめざさん                         |
| 13 | 1972年<br>（5/28， 6/7<br>－11）  | 高らかに歌え！ 青春の叙事<br>詩         | 迫りくる嵐そして濤 我ら勇敢<br>な「海つばめ」たらん                                       |
| 14 | 1973年<br>（6/6－10）            | 日々新たなる青春の復権を               | 生ける科学の草の根よ 雄々し<br>く育て 行く手を阻む 巨岩<br>を砕け                             |
| 15 | 1974年<br>（6/5－9）             | 大学ににんげんのうたを                | それは模索し発展する科学のう<br>た 語らい呼びかわす連帯のう<br>た 培い励まし合い国民のため<br>の日本をつくる変革のうた |
| 16 | 1975年<br>（6/4－8）             | ひきしばれ青春の弓                  | 射よ嵐の目に 熱き鋼の矢を  |
| 17 | 1976年<br>（6/9－13）            | 響け われらのロンド                 | 吹きぬける科学の烈風 黒雲を<br>裂け わきあがれ大地に 建設<br>のエネルギー                         |
| 18 | 1977年<br>（6/8－12）            | 湧きあがれ 学問と変革のシ<br>ンフォニー     | ひたむきな歴史の探索と 確信<br>への追求から 今生み出される<br>明日への飛翔 我が学舎と 当<br>惑する祖国に       |
| 19 | 1978年<br>（6/7－11）            | 我らの手で真の科学を                 | 我ら数多なる知の泉、歴史の大<br>河にそそぎ 深き流れとなりて<br>逆流をつき破らん                       |
| 20 | 1979年<br>（6/5－10）            | 知を力に 逆風に対峙し奏で<br>よう 変革の前奏曲 |  |

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

した。一九七〇年以降、名大祭のテーマ表現が明らかにそれ以前と異なっている背景には、そうした事情があったといえます。

#### ◆一九七〇年代の名大祭テーマアピール

この時期の名大祭パンフレットに掲載されたテーマアピールに目を向けると、当時の社会情勢やそれに対する学生の認識がとてよく理解できます。以下に、そのいくつかを紹介していきます。

人間らしく生きたい——僕たちはいつもそう思う。人間らしく生きる——こんなあたりまえにみえることが決して容易ではない、僕たちの時代。小学校の門を、小さな胸をふくらませてくぐった、その時に先ず知らされた「できる子」「できない子」という言葉。中学校時代、受験時代の差別と選別の教育のなかで、見えるものに目をつぶり、聞こえるものに耳をふさいで「死なないように生きる」ことを強いられてきた僕たち。……(略)……「青春」と「信頼」、この二つの言葉を持つ、本来の輝きと「美しさ」が失われて久しいけれど、僕たちは知ってはいないか。「こんな『青春』でない、別の『青春』がもつとほかのところにあるはずだ」「こんなばらばらな僕たちだけれど、そんな僕たちだけ

『信頼』でできる友達がほしい」そんな願いと、言葉の持つ「美しさ」、言葉への信頼をとりもどす願いをこめて、……(略)……第一四回名大祭ははじまる。

(『第一四回名大祭パンフレット』)

僕たちの学問は、国民生活との関わりを無視しては考えられない。「何のために学ぶのか」という問いかけ。この学生としての僕たちにとつて最も真摯しんしな問いに、「国民のための大学」という言葉をもつて、何らかの方向性が与えられはしないか。僕たちはそれを今年の名大祭でめざしたいと思う。学生に共通の基盤の一つは「真理を究める」ということだ。……(略)……しかし自分のまわりをながめてみると、その最も基本的な基盤さえ、今非常に脆弱ぜいじやくなものとなつてしまつていることを感じる。……(略)……どう見ても将来への展望がわいてこない社会の現状。不公平と不正が横行し、強い者はあくまで強く、弱い者が徹底的にいじめぬかれる今の世の中、真理の存在すらが疑わしくなる日常の生活で、ともすればその日常に慣らされてしまいながら、それでも満足できず、僕たちは今確かなものを掴つかみたいと願つて……(略)……

(『第一九回名大祭パンフレット』)



名大祭フォークダンス風景（『第13回名大祭パンフレット』より）

これらのテーマアピールには、一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期のなかで、受験競争社会をくぐり抜けてきた学生の真情が示されていると思われる。

## 五、時代を映す名大祭③—一九八〇年代

### ◆テーマの簡潔化

名大祭一覧（3）には、一九八〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。第二回名大祭以降は、サブテーマが設けられなくなっている点に一つの特徴があります。また、もう一つの特徴として、すでに一九七〇年代からみられたメインテーマが短